最上稲荷のおみくじにおける和歌

――江戸の和歌占い本『晴明歌占』との関係――

平野多恵

はじめに

おみくじは本来、神仏のお告げであり、それがどのような形で書かれているかで三大別できる。「漢詩みくじ」「和歌みくじ」「その他」である。このうち寺院では「漢詩みくじ」が多く、神社は「和歌みくじ」が多い傾向がある。「その他」は寺社を問わず、水に浮かべると文字が浮かび上がる水占や方言で書かれたご当地おみくじなど、近年、さまざまな種類のおみくじが生まれている。

現代の寺院における漢詩みくじは江戸時代に流行した観音菩薩のおみくじである観音籤（元三大師御籤とも）が一般的だが、江戸時代には法華経御籤や関帝籤など、その他の漢詩みくじも流布していた。和歌みくじやそのルーツとなる和歌占いも天神や安倍晴明に関わるものなど、さまざまな種類があった。しかし、明治時代以降、観音籤以外の漢詩みくじは稀になり、江戸時代の和歌占い・和歌みくじの文化もほぼ見られなくなった。

そのようななか、最上稲荷（岡山県岡山市北区）のおみくじは江戸時代の版本を継承し、漢詩と和歌が併記されるもので、おみくじの歴史を考えるうえで意義深い。本稿は、最上稲荷おみくじを調査・分析し、江戸時代に出版された和歌占い書『せいめい うた占 全』との関係を明らかにすることで、日本のおみくじ史に位置づけようとするものである。

一、最上稲荷のおみくじ―法華経・和歌・英訳―

最上稲荷山妙教寺（略称：最上稲荷）は伏見稲荷・豊川稲荷とともに日本三大稲荷の一とされる。日蓮宗の寺院だが、明治時代の神仏分離の波をこえて神仏習合の祭祀形態が許された、仏教の流れを汲むお稲荷さまである。現代でも大鳥居や神宮形式の本殿をはじ

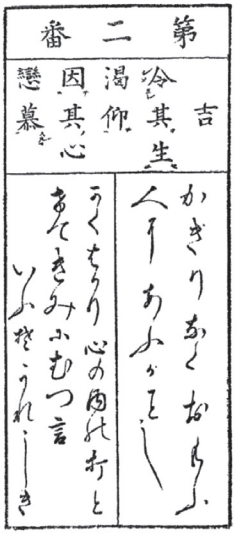
め、神仏習合の姿を残すことで知られる。本尊は「最上位経王大菩薩」、脇神が「八大龍王尊」と「三面大黒尊天」で、あわせて最上三神と称される。

最上稲荷の縁起によれば[1]、天平勝宝四年（七五二）、報恩大師に孝謙天皇の病気平癒の勅命が下り、龍王山中腹の八畳岩で祈願したところ、白狐に乗った最上位経王大菩薩が降臨したという。大師がその尊影を刻んで祈願を続けたところ天皇は快癒し、延暦四年（七八五）、桓武天皇の病も大師の祈願で快癒したため、勅命によって現在の地に「龍王山神宮寺」が建立されたという。「神宮寺」とは神仏習合思想に基づいて神社に付属して建てられて仏教寺院で、神前読経などの神社の祭祀が仏式で行われた。

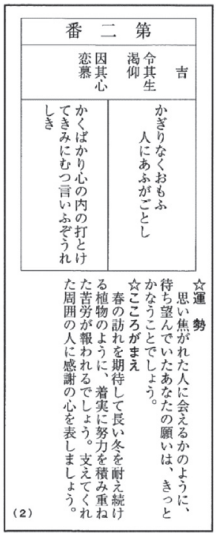
羽柴（豊臣）秀吉による備中高松城水攻めの戦禍により、堂宇が焼失したものの、本尊の像だけは難を逃れ、慶長六年（一六〇一）、この像をもとに関東から招かれた日円聖人が寺名を「稲荷山妙教寺」と改め霊跡を復興したという。明治の神仏分離令で神仏習合の寺社のほとんどが分立・廃絶したなかで、最上稲荷では神仏習合の祭祀形態を残し、日本の神仏習合の信仰を今に伝える寺院として意義深い。

最上稲荷のおみくじも神仏習合の姿を残すものとして特筆すべき価値がある。江戸時代の版木をもちいたもので、おみくじの歴史において漢詩と和歌の関係を考えるうえでも貴重である。

現在の最上稲荷のおみくじは次のような構成である（図版1・2）



（図版1）



（図版2）

表面（図版1）は最上稲荷所蔵の江戸時代の版木をもとにしており、冒頭に番号（第一番～第三十三番）、上段に吉凶（大吉・吉・半吉・凶・半凶・大凶）と法華経の経句、下段右に「～ごとし」で終わる比喩の一文や解説、下段左に三十一文字の和歌が印刷されている。裏面（図版2）は上部に表面を活字にしたものを、下部には上部のおみくじに基づく「運勢」と生活の指針としての「こころがまえ」を付記する。

第二番（図版1・2）を例にとると、法華経の経句「令其生渇仰、

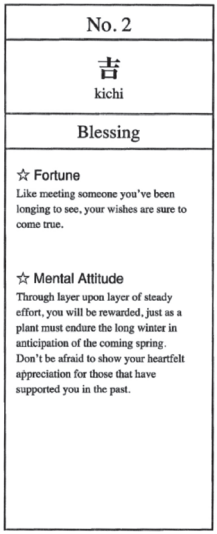
因其心戀慕」は法華経の如来寿量品第十六所収「自我偈」の一節である。送り仮名が摩滅していて判読しがたいが、「其れをして渇仰を生ぜしむ、其の心恋慕するに因りて」と読んでおく。経典の直前部分を（　　）で補って当該部分を訳すと、（釈尊が入滅して姿を現さないことで）かえって人々は釈尊を渇仰し、恋慕することになるという意味である。

下段右の「かぎりなくおもふ人にあふがごとし」は経句に関連する内容を比喩であらわした一文である。この場合は、入滅した釈尊を恋慕する経句の内容が「この上なく想いを寄せる人に出逢う」状態と対応関係にある。さらに、下段左の和歌「かくばかり心の内の打とけてきみにむつ言いふぞうれしき」も、心をひらいて恋しい人と語り合ううれしさを詠んだものであり、経句の内容と関連する。ここでの喩え「～ごとし」や和歌は、法華経の内容と関連するものであり、経文の理解の一助として添えられたと考えてよいだろう。

裏面に付記された「運勢」と「こころがまえ」は、表面の内容を現代語で解説したものである。

最上稲荷のおみくじが、このような両面印刷になったのは一九九七年である。それ以前は版木に基づく表面を活字に直して印刷したもので、意味がわかりにくいという意見が多かったため、このような改訂をおこなったという。

二〇一七年には、このおみくじの英訳版もつくられた。最上稲荷では二〇一五年頃から外国人観光客が急増し、同年一二月に英語版のホームページを開設、二〇一六年には本殿周辺にフリーWi-Fiを設置し、インスタグラムの公式アカウントも開設した。そして二〇一七年二月に本殿前に英訳おみくじが設置された。英訳版は右の日本語版を英訳したものである。表面は日本語版と同じで、裏面（図3）に英語で吉凶、運勢（Fortune）、心がまえ（Mental Attitude）が書かれている。


No. 2

吉
kichi

Blessing

☆ Fortune
Like meeting someone you've been longing to see, your wishes are sure to come true.

☆ Mental Attitude
Through layer upon layer of steady effort, you will be rewarded, just as a plant must endure the long winter in anticipation of the coming spring. Don't be afraid to show your heartfelt appreciation for those that have supported you in the past.

（図版3）

英訳にあたっては、外国人に理解しやすいように比喩表現が変えられたところもある。たとえば「鶴のように長寿で」は、鶴に長寿のイメージがない国も多いことから、「リクガメのように長寿で」とするなどである。

法華経の経句に添えられた和歌は漢訳仏典の和訳ともいえる。英語版は、さらに英訳が加わったもので、漢文から和文へ、そして英文へと、最上稲荷の英語版おみくじは日本の翻訳文化を体現するような存在といえるだろう。

二、他の法華経御籤との関連
―『法華経御圖霊感籤』との比較

前述のように、最上稲荷のおみくじには上段に法華経の経句が示されている。最上稲荷のおみくじ解説によれば、この法華経の経句は「願いごとの可否をしめす最上さまからの開運指南」だという。[2] おみくじの引き方についても「一、最上さまに合掌して、お願い事を一つにしぼり心を落ちつかせておみくじをひきましょう」[3]とあることから、法華経の経句は本尊の最上さまへのお願いに対するアドバイスと知られる。

最上稲荷のおみくじと同じく法華経の経句による御籤本に、江戸時代末期に出版された『法華経御圖霊感籤』全三冊がある。この御籤本については芹澤寛隆の研究に詳しい。[4] 以下、その研究に導かれつつ、こちらの調査も補って基本的なところを紹介しておきたい。国文学研究資料館の古典籍総合データベースによれば、現在知られる最古の『法華経御圖霊感籤』は天保三（一八三二）年刊の版本である（津市図書館蔵橋本文庫目録所載）。その後、増補されて、文久元（一八六一）年に『大増補 法華経御圖霊感籤全』（成蹊大学、弘前市弘前図書館他蔵）が刊行された。これらは上・中・下の前三冊で下巻に法華経のおみくじを収載する。明治時代に入るとおみくじを収載した巻だけが独立し、『法華経御圖』（松沢庄次郎 編、明治十五（一八八二）年）、『首書御圖入 法華経要品和訓 全』（上野義明編、森江商店、明治三十（一八九七）年）、『通俗絵抄 法華経御籤感応籤 全』（微徳隠士著、此村欽英堂、明治四十二（一九〇九）年、昭和十年第七版）などが刊行された。現存本の状況から考えても、芹澤の研究が明らかにするように、明治・大正期までは版を重ねて活用されていたが昭和四十年代には衰退したと見てよいだろう。このように『法華経御圖霊感籤』（以下、『法華経御圖』と略称する）系統の御籤本は江戸末期から明治・大正・昭和のはじめまで流布した。

この系統の本は、江戸時代からの版木に基づくという最上稲荷のおみくじと関係しないのだろうか。

それを検討するため、最上稲荷のおみくじと『法華経御圖』の構成を比較する。それぞれの構成要素は以下の通りである。

○最上稲荷：番号（一～三十三）、吉凶（大吉・吉・半吉・凶・半凶・大凶）・法華経の経文・「～ごとし」の一文・和歌。
○『法華経御圖』：番号（一～九十六）・吉凶（大上吉・大吉・吉・半吉・凶・大悪）・総運・法華経の経文・経文に関係する図絵・御籤の意味・項目ごとの解説。

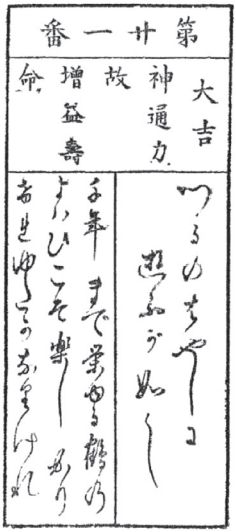
番号は最上稲荷おみくじが全三十三番、『法華経御圖』は全九十六番である。最上稲荷の三十三番の由来は不明だが、観音菩薩の三十三身などにちなむ数かとも推測される。『法華経御圖』が全

九十六番であるのは、『法華経』見宝塔品第十一の「此経難持」から「皆応供養」までの文字数が九十六字であることに由来するという。[5]

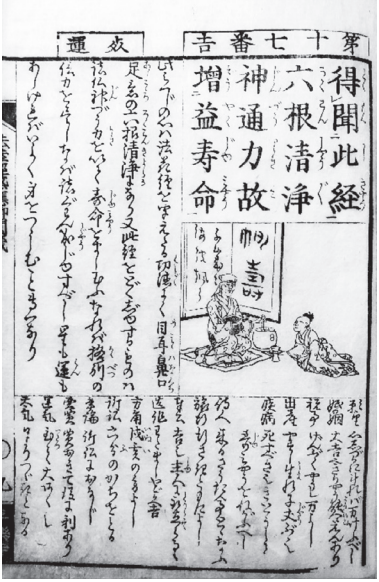
吉凶の種類にも違いがあり、最上稲荷のおみくじには、『法華経御鬮霊感籤』の「大上吉」や「大悪」がない。最上稲荷おみくじに付される「～ごとし」の一文と和歌も『法華経御鬮』には見られない。『法華経御鬮』には、挿絵と御籤の意味、項目ごとの解説が記されており、このような構成は江戸時代に流布した観音籤、いわゆる元三大師御籤の影響を受けたものと考えられている。[6]

引用された法華経の経文も最上稲荷は二句、『法華経御鬮』は四句と異なる。たとえば、最上稲荷第廿一番（図4）と『法華経御鬮』第十七番（図5）は、どちらも法華経「神通力故、増益寿命」を引いているが、両者の解説を見るかぎり影響関係は看取できない。他にも薬草喩品第五「充潤一切　枯槁衆生」（最上稲荷第八番／法華経御鬮第七十三番）と薬王菩薩本事品第廿三「如渡得船　如病得醫」（最上稲荷第十四番／法華経御鬮第五十九番）の二点で引用箇所が重なるものの、直接の影響関係を示す証拠は認められない。法華経二十八品のどの品を引用しているかについても、『法華経御鬮』が二十八品から万遍なく引用されるのに対して、最上稲荷のおみくじは二十八品のうち十一品[7]しか引用されておらず偏りがある。

このような相違から、最上稲荷のおみくじは江戸末期から刊本として流布した『法華経御鬮霊感籤』とは異なる独自のものと見てよいだろう。



（図版 4）



（図版 5）

三、江戸の和歌占い本『晴明歌占』との関係
―比喩の一文と和歌

次に、最上稲荷おみくじ下段に書かれた「～ごとし」の一文と和歌について検討したい。

これらの多くは江戸時代の和歌占い本『せいめいうた占全』（以下、『晴明歌占』と表記）の内容と共通する。

『晴明歌占』（成蹊大学他蔵）は平安時代の陰陽師・安倍晴明に仮託した和歌占いの書である[8]。全六十四首で、内容は、挿絵、吉凶、一・二・三・四の数字の組み合わせによる番号（一一一～四四四）、「～ごとし」の一文、和歌で構成されている。

（図版６）

『晴明歌占』現存最古の刊本は安永七（一七七八）年版（図版６、架蔵）である[9]。安永七年版は表紙見返しにあったはずの序文を欠くが、刊年不明版（成蹊大学蔵）の序文には、安倍晴明が入唐して伯道上人の弟子となり、占方の伝授を受けたとある。これは晴明を撰者に仮託する陰陽道の占書『三国相伝陰陽轄轄簠簋内伝金烏玉兎集』の由来に重なり、その影響が看取される。浅井了意の仮名草子『安倍晴明物語』（寛文二（一六六二）年刊）は安倍晴明の一代記の後に、天文・日取り・人相の占いを付すもので、以後、晴明の名を付けた占書は『晴明通変占』（貞享三（一六八六）年刊）、『晴明秘伝見通占』『晴明夢はんじ』など、晴明の名を付けた様々な占書が出版された。『晴明歌占』もそのような中で出版された一書とみられる。

『晴明歌占』は天照大神・八幡大菩薩・春日大明神の御名を三遍唱えてから占う。これは当時流行していた天照・八幡・春日の三神による託宣である三社託宣の信仰をふまえる。『晴明歌占』には、日吉・出雲・石清水を詠み込んだ歌も収められている。

『晴明歌占』は明治時代も巷間に流布していた。井上円了『妖怪学講義』（合本第三冊、哲学館、明治二十九（一八九六）年刊、国立国会図書館デジタルコレクション所収）に「俗間に伝はる書には、安倍晴明の歌うらなひと称して、天照太神、八幡大菩薩、春日大明神、此三社の神の示現にまかせ、易の六十四卦をかたどり六十四首の和歌を集めて歌占と名くる」とあり、その内容は『晴明歌占』の

序に一致している。

大正時代になると、『晴明歌占』の和歌占いは安倍晴明と切り離された。岡部弥次郎編『歌占』（大正二（一九一三）年刊、国立国会図書館デジタルコレクション所収）がそれで、和歌は『晴明歌占』に一致するが、序文がなく、安倍晴明との関連づけはなくなっている。[10]

以上から、『晴明歌占』は遅くとも安永年間までに出版され、以後、同じ和歌を用いた占書が大正時代まで流布していたことが知られる。

ここで注目したいのは、最上稲荷おみくじの「～ごとし」の一文と和歌が、『晴明歌占』と多く重なっていることである。

次頁に最上稲荷おみくじと『晴明歌占』の内容を比較した一覧表をあげる。

具体的な例として最上稲荷おみくじ第二番（図版1）と『晴明歌占』一一二（図版6）を見てみよう。冒頭で紹介したように、最上稲荷第二番の「～ごとし」と和歌は「かぎりなく思ふ人にあふがごとし」と「かくばかり心の内の打とけてきみにむつ言いふぞうれしき」である。『晴明歌占』一一二は、上段に二人の男が談笑する絵を載せ、下段右に「吉」の下に番号「一一二」、その下に「かぎりなく思ふ人にあふがごとし」とある。下段左は和歌「かくばかり心のうちのうちとけてきみにむつごといふぞうれしき」を載せる。ここから明らかなように、最上稲荷第二番と『晴明歌占』一一二は比喩の一文と和歌が共通している。しかも『晴明歌占』は冒頭に一一一、二番目に一一二を載せており、番号順から見ても最上稲荷おみくじと『晴明歌占』の近さが見てとれる。

次頁の一覧表からわかるように、最上稲荷おみくじの和歌三十三首のうち、『晴明歌占』とほぼ同じ歌（◎）が二十首、一部が同一表現あるいは同内容の歌（○）が九首ある。つまり、二十九首に『晴明歌占』との共通性が認められる。さらに見ていくと、最上稲荷おみくじの歌は『晴明歌占』全六十四首の前半三十二首に集中している。和歌以外にも、「～ごとし」というたとえの部分は十五点（◎）、吉凶は十九点で共通する。以上から、最上稲荷のおみくじは『晴明歌占』と非常に近い関係にあることが明らかである。

とはいえ、異なる点もある。たとえば、和歌の一部のみが共通する例を検討すると、『晴明歌占』が恋歌の場合に最上稲荷おみくじでは信仰に関連する表現となっていることに気づく。たとえば、『晴明歌占』二四四「ひとりしてふたりをおもふいかなればふたりにひとりおもはざりけり」に対して、最上稲荷第三十二番「ひとすぢにまことをふめよ二道をかけてあやふき谷の掛橋」である。晴明歌占は上句に「ひとりしてふたりをおもふ」とあり、喩えの文も「女のおとこ二人もつがごとし」であることから、男女間の二股関係を詠んだものであることは明らかだ。これに対して、最上稲荷の上句は「ひとすぢにまことをふめよ」とあり、二股を戒めて一つの方向に向かって誠実に進むことを勧めており、恋愛を離れた歌と

「一致度」の記号は以下を意味する。◎ほぼ一致、○一部表現が一致、意味も共通、△意味が共通、×共通なし

歌		「〜ごとし」の一文		
晴明歌占	一致度	最上稲荷	晴明歌占	一致度
	×	何事も心のまゝ我人ともに悦のかたちよいよ信心して冨貴自在なるべし		×
かくばかり心のうちのうちとけてきみにむつごといふぞうれしき	◎	かぎりなくおもふ人にあふがごとし	かぎりなく思ふ人にあふがごとし	◎
	×	よろしき事をはじめてわれ人をすゝむるすがた信心けんごにして大によし		×
むらくもゝかくるゝほどはくらかりきあらしにはるゝあきのよの月	◎	秋の月のはるゝが如し	秋の月の晴るるがごとし	◎
いづくをばおのがすみかとおもへどもとむるこゝろをやどゝさだめよ	◎	水にながるゝものゝごとし	水にながるゝもののごとし	◎
しろがねやこがねの玉といひけれどみがゝぬときはひかりなきもの	◎	玉の光なきが如し	玉の光無きがごとし	◎
はなあれどくらきに見へぬさよなかに月のいづるぞうれしかりけり	◎	う糸し時食にあふが如し	ひだるきときめしにあふがごとし	
つゆのねにくさ木のこずゑいかにせんさのみに糸だはしほれけるかな	○	木草の根にはなれたるが如ししんじん第一にすべし	くさのねにはなれたるごとし	◎
さきのよにいかなるつみをつくりてかかほどさびしきことぞうらめし	○	信心不怠に神佛を祈らずば運命あやうし	おもはざるきみなるがごとし	×
うれしさをなににたとへんかたぞなきたゞあらましのたもとゆきかな	○	蝶の花を楽しむが如し	よろづたのしむがごとし	○
たびころもよそを見ばやとおもひしにきりをへだつるみほのまつばら	◎	行道にせきあるが如し信心第一にして災難をのがるべし	ゆくみちにせきあるがごとし	◎
くらきよりくらきにかけてかなしやなともしび糸たるみちぞうれしき	◎	くらき夜にともし火を得たるが如し	くらきにともしび糸たるがごとし	◎
手にむすぶ水にやどれる月かげのあるかなきかのよにもすむかな	◎	いなづまのひかりなきが如し信心肝心たるべし	いなづまのひかりなきがごとし	◎
すゑとをくおもひしみちのほどもなくみなとにふねのいるぞうれしき	◎	渡りにふねを得たるが如し	わたりにふねを糸たるがごとし	◎
此よをば今は果てかと思ひしに豊かになりてうれしかりけり	◎	たえたる家をおこすが如し	たへたるにきしゃうするがごとし	×
なにごとも心にかなふこのうへは神や仏のりしゃうある身に	◎	求めずして宝を得たるが如し	おもはずたからを糸たるがごとし	◎
ながむればこひしき人のこひしさにくもらばくもれあきのよの月	○	月のくもるが如し信心堅固にしてひかりあらはるべし	月のくもるがごとし	◎
とぶとりのとびゆくとりのとりどりに木にはとまらでつちにおつらん	○	飛鳥の羽なきが如し信心第一にいたすべし	とぶとりのはねなきがごとし	◎
ゆみやとる人をばまもるおとこやます糸もひさしきいわしみづかな	◎	いくさに弓矢を得たるが如し	いくさにゆみやを糸たるがごとし	◎
いつとなくなみだのあめのはれやらでそらにはるゝか月はみへねど	○	かにのあしなきがごとし信心第一たるべし	かにのあしなきがごとし	◎
ちよまでとさかゆるつるのよはひこそたのしきときはゆたかなりけり	◎	つるのはやしに遊ぶが如し	つるのはやしにあふがごとし	◎
おもほへでいまははてかとおもひしにすへたのもしき人ぞうれしき	○	信心おこたらざれば大によし不信にして運をそこなふべからず	かこの内のとりの糸を糸たるがごとし	×
	×	信心けんごなるときは吹風枝を鳴さず不堅固なる時は風枝を折る		×
いかにせんしのびくるまのかたわこそやるかたもなきことぞかなしき	◎	愚にして悪しきに入る信心して凶災を免るべし常に普賢菩薩を祈る事かんじんなるべし	くるまのわのなきがごとし	×
	×	祈るときは心の如く成就す不信心にして利益を忘るべからず病人次第によし		×
身もくるし心ほそくもありつるにふしのくすりにあふぞうれしき	◎	信心第一にして大によし不信心なる時は必ず災難来るべし病者漸次によし	やまひにくすりを糸たるがごとし	△
おもひでのかずかずおゝきわが身かなはな見るときは月もくもらず	◎	神佛の得益深き身なりさり乍ら不信心なる時は災あるべし常に普賢菩薩を祈りて開運すべし	あつきにすゞしきかぜを糸たるがごとし	×
宿もなしそのかよひぢをおぼへぬにこゝろほそくもいりあひのかね	○	過去より福報うすく大望を謹むべし信心堅固なれば次第に開運あるべし不信心の時は老ても災逃れがたし病人至てあし	しらぬみちに日のくれたるがごとし	×
たゞたのめしめぢがはらのさしもぐさわれよのなかにあらんかぎりは	◎	常に神佛の利益あり信心なる時は必ず開運すべし願事成就病人漸次によし	かみのまもりあるがごとし	△
すえとをくたのしむべしとおもひしにおやのこゝろはしらかわのせき	◎	病人次第におもるべし信心して快方縁談事もむつかしく商ひ損失あるべし	おやのこゝろこわきがごとし	×
いひもせずいわねもせじとおもへどもいまはわが身のうへとこそなれ	◎	何事もひかえ目にしてよしおろかにして物事十分なればあしく信心して望事成就すべし	くすりのどくをはくがごとし	×
ひとりしてふたりをおもふいかなればふたりにひとりおもはざりけり	○	妻妾相軋るが如し晝夜思ひ出し事何事もあしく信心第一にして凶災のがるべし病人至てあし	女のおとこ二人もつがごとし	△
いまゝではくるしみの身にすぎつるに人のなさけと神のりしゃうと	◎	何事も心のまゝ願事成就すべし病人次第に全快し金銀財宝を得る事有るべし	めくらのめあくがごとし	△

最上稲荷おみくじ・『晴明歌占』対照表

番号		吉凶		法華経の経句（出典）	和
最上稲荷	晴明歌占	最上稲荷	晴明歌占	最上稲荷おみくじ	最上稲荷おみくじ（歌）
1		大吉		栴檀香風 悦可衆心（序品第一）	せんだんは二葉よりしも香しき心のうちのちかひなるらむ
2	112	吉	吉	令其生渇仰　因其心恋慕（如来寿量品第十六）	かくばかり心の内の打とけてきみにむつ言ふぞうれしき
3		半吉		植諸善本 深心堅固（譬喩品第三）	御詠歌　過去よりも未来に通るかりの宿 雨ふらばふれ風ふかばふけ
4	114	大吉	吉	如日月光明　能除諸幽冥（如来神力品第廿一）	村雲にかくるゝほどはくらかりきあらしにはるゝ秋の夜の月
5	121	半吉	半吉	随應所可度　為説種種法（如来寿量品第十六）	いづくをかおのがすみ家とおもへども とむるこゝろをやどとさだめよ
6	122	凶	凶	無智疑悔 則為永失（薬草喩品第五）	白銀やこがねの玉もそのまゝにみがゝぬときはひかりなきなり
7	123	吉	吉	諸山深嶮處　栴檀樹花敷（法師功徳品第十九）	花あれどくらきに見えぬ小夜中に月の出るぞ嬉しかりける
8	124	凶	凶	充潤一切　枯槁衆生（薬草喩品第五）	いかにせん根なき草木は枝も葉も日をふるゝに しをれこそすれ
9	131	凶	凶	晝夜受苦　無有休息（譬喩品第三）	さきのよにいかなる罪を作りてかかくすさまじき身とぞなりぬる
10	132	大吉	吉	我此土安穏 天人常充満（如来寿量品第十六）	嬉しさを何にたとへんかたぞなき月雪花も我ものにして
11	133	凶	凶	而今此処 多諸患難（譬喩品第三）	旅衣よそに見ばやと思ひしに 霧にへだつる三保の松原
12	134	大吉	吉	如貧得寶　如闇得燈（薬王菩薩本事品 第廿三）	くらきよりくらきにかけて行道のともし火得たる夜半ぞうれしき
13	141	凶	凶	矬陋惡聾　盲聾背傴（譬喩品第三）	手に結ぶ水にやどれる月かげのあるかなきかの世にぞすむ かな
14	142	吉	吉	如渡得舩　如病得醫（薬王菩薩本事品 第廿三）	末遠き八重のしほぢの程もなくみなとに舩のいるぞ嬉しき
15	143	大吉	吉	令此三界　皆是我有（譬喩品第三）	この世をも今はかぎりと思ひしに豊かになりてうれしかりけり
16	144	大吉	吉	無量珍寶 不求自得（信解品第四）	何事も心にかなふ世の中や神や佛の利生ある身は
17	211	凶	凶	雖復教詔　而不信受（譬喩品第三）	むら雲のよしかゝるとも神風のふかばはれなん秋の夜の月
18	212	大凶	凶	衆苦充満 甚可怖畏（譬喩品第三）	大空を心のまゝにとぶ鳥も翼なければつちに落なん
19	213	吉	吉	具足神通力　廣修智方便（観世音菩薩普門品第廿五）	弓矢とる人を守れる男山末も久しき石清水かな
20	214	凶	凶	於諸欲染　貧着深故（譬喩品第三）	大空ははるれど月は見えわかず涙の雨に曇る身なれば
21	221	大吉	吉	神通力故　増益寿命（常不軽菩薩品第廿）	千年まで栄ゆる鶴のよはひこそ楽しかりけれゆたかなりけれ
22	222	吉	吉	我此土安穏　天人常充満（如来寿量品第十六）	よるべなき身と思ひしに今よりは末たのしきときくぞうれしき
23		吉		如風於空中　一切無障礙（如来神力品第廿一）	咲みてる心驕りを夜のほとに 吹きおどろかす花の下風
24	224	凶	凶	愚小無知　而入嶮宅（譬喩品第三）	如何にせん思ひ車の片輪こそやるかたもなくかなしかりけれ
25		吉		充満其願　如清凉池（薬王菩薩本事品 第廿三）	一すぢに祈れや祈れみしめ縄うけ引く神の誓たのみて
26	232	吉	吉	此経能救　一切衆生者（薬王菩薩本事品第廿三）	身も苦し心も細くありつるに不死の薬に逢ふぞ嬉しき
27	233	吉	吉	如裸者得衣　如商人得主（薬王菩薩本事品第廿三）	思ひでの数々多き我身かな花見る峰の月もくもらず
28	234	凶	凶	薄福得故　為火所逼（譬喩品第三）	宿からんその通ひぢもしられぬに こゝろ細くも入あひの鐘
29	241	吉	吉	為常見我故　而生憍恣心（如来寿量品第十六）	只頼めしめぢが原のさしも草 我世の中にあらん限りは
30	242	半凶	凶	是諸罪衆生 以悪業因縁（如来寿量品第十六）	末遠く楽しむべしと思ひしに 親の心は白川の関
31	243	半凶	凶	不織苦盡道　不知求解脱（化城喩品第七）	いひもせずいはれもせずと思ひしに今は我身の上とこそなれ
32	244	凶	凶	長夜増悪趣　減損諸天衆（化城喩品第七）	ひとすぢにまことをふめよ二道をかけてあやふき谷の掛橋
33	311	大吉	吉	今仏得最上　安穏無漏法（化城喩品第七）	今までは苦しみありつるが人の情けと神の利生

なっている。しかしながら、和歌の右に書かれた文章には「妻妾軋るが如し」とあり、妻と妾が争いあう男の比喩をあげており、男女間の二股が意識されている点で『晴明歌占』と通じ合う。

『晴明歌占』二一一「ながむればこひしき人のこひしさにくもらばくもれあきのよの月」に対して、最上稲荷の第十七番は「むら雲のよしかゝるとも神風のふかばはれなん秋の夜の月」である。第五句の表現「秋の夜の月」が一致し、どちらも雲が掛かった秋の夜の月を詠んでいる。「～ごとし」の一文も「月のくもるが如し」で共通する。しかし、『晴明歌占』が「ながむればこひしき人のこひしさに」で恋歌であるのに対して、最上稲荷では「神風がふかばはれなん」と神のご加護を詠む点で異なっている。ここで「神風」がもちいられているのは、最上稲荷が神仏習合の寺院であることによるものだろう。

最上稲荷おみくじの神仏習合の特徴は、「神や佛の利生ある身は」（第十六番）、「弓矢とる人を守れる男山末も久しき石清水かな」（第十九番）、「神の誓たのみて」（第二十五番）、「只頼めしめぢが原のさしも草……」（第二十九番、『新古今和歌集』等に清水観音の託宣歌として収載）、「神の利生」（第三十三番）など、他の和歌にも認められる。

その他の相違点についても検討しておきたい。最上稲荷おみくじで『晴明歌占』と重ならないのは四首（×）である。その出典は不明だが、第三番は「御詠歌 過去よりも未来に通るかりの宿 雨ふらばふれ風ふかばふけ」で、この歌だけが「御詠歌」と記載されている。「御詠歌」とは、一般的に霊場めぐりの巡礼が唱える短歌調の讃歌で、霊場・札所・仏・祖師などの徳をたたえた歌とされる（『例文 仏教語大辞典』）。この歌が霊場めぐりの御詠歌として唱えられたかどうかは不明だが、鈴木正三『盲安杖（もうあんじょう）』に一休和尚の歌として載る「過去よりも未来へ通る一休み風ふかばふけ風ふらばふれ」[11]とほぼ共通するのが注目される。第三句「一休み」が最上稲荷で「かりの宿」である点は異なるが、あとはすべて一致する。

鈴木正三（一五七九～一六五五）は江戸初期の禅僧で、仮名草子作者としても知られる。徳川家康・秀忠に仕えた後に出家し、曹洞禅を修めた。『盲安杖』は鈴木正三の法語集で、元和五（一六一九）年に成立したものである。最上稲荷おみくじは江戸初期の版木に基づくものと伝わっており、『盲安杖』所載の一休の道歌との関係が注目される。

その他、最上稲荷おみくじの第二十二番以降で、『晴明歌占』にある「～ごとし」の表現が使われなくなっているのも相違点である。第一番～第二十一番まではおみくじ下段右は「～ごとし」という一文が冒頭に書かれているが、第二十二番からは「信心おこたらざれば大によし。不信にして運をそこなふべからず」（第二十二番）、「信心第一にして大によし。不信心なる時は必ず災難来るべし。病者漸次によし」（第二十六番）のように、「信心」が重視され、文章も長くなっている。とはいえ、『晴明歌占』との関連がみとめ

られないわけではなく、第二十六番は『晴明歌占』二二二と和歌が一致し、『晴明歌占』の「病に薬を得たるがごとし」の一文は最上稲荷第二十六番の「病者漸次によし」と通じている。

以上から、最上稲荷おみくじの和歌と「～ごとし」の文章は、『晴明歌占』と近い関係にあると見てよいだろう。最上稲荷おみくじの番号が『晴明歌占』の掲載順とほぼ一致することからも、その関係の近さがうかがわれる。

最上稲荷おみくじ独自の主な特徴は、第二番の御詠歌の鈴木正三『盲安杖』所載歌との一致、『晴明歌占』における恋歌が神の信仰に関わる表現になっていること、下段右の解説で「信心」が強調されること（とくに第二十二番以降）にまとめられる。

おわりに

ここまで『晴明歌占』における和歌と「～ごとし」文の共通性に着目して、最上稲荷おみくじの特徴を検討してきた。今回とりあげた『晴明歌占』以外にも、江戸後期から幕末には、さまざまな歌占本が出版されていた。[12] 代表的なものに『歌占 萩の八重垣』（享和元（一八〇一）年刊）、菅原道真を歌占の神とする『天満宮六十四首歌占御圖抄』（寛政十一（一七九九）年刊）、『百人一首倭歌占』（天保十四（一八四三）年刊）、『百人一首歌占鈔』（花淵松涛著、嘉永元（一八四八）年刊）などがある。

このうち『天満宮六十四首歌占御圖抄』は漢詩御籤の代表といえる「元三大師御籤（観音籤）」の影響を強く受け、神仏習合の思想を反映した和歌みくじ本である。[13] 江戸時代までは神仏習合の考え方が浸透し、神社と寺院が同じ境内にあることも一般的であった。そのため神社でも仏教系の漢詩みくじである元三大師御籤をもちいるところは多かったが、それらは明治維新による神仏分離を契機の一つとして次第に姿を消し、神社では仏教の影響を排した新たな和歌みくじが創られるようになった。[14] それによって、寺院は漢詩、神社は和歌というおみくじの棲み分けが生まれたのだった。

このような時代の波を乗り越えて、最上稲荷おみくじは江戸時代の姿を今に伝えて貴重である。寺院は漢詩みくじ、神社は和歌みくじと分類されるなかで、漢詩と和歌が併存する点も特筆される。漢詩みくじに和歌を併記する例は、かつては元三大師御籤の御籤本でも見られたが、現在では廃れてしまった。仏のことばをあらわす漢詩と、神のことばをあらわす和歌が併存するおみくじが現代まで伝えられたのは、最上稲荷が神仏習合の信仰の場であったからだろう。先述のように、最上稲荷のおみくじでは、和歌や解説で神への信仰が勧められており、神仏習合の信仰がみとめられる点も注目に値する。

現代では、わかりやすさを求めて神仏のお告げである漢詩や和歌をなくしてしまうおみくじが散見される。そうしたなかで、最上稲荷おみくじは、江戸時代の姿を保ちつつ、現代語でわかりやすい解

説を加え、さらには英訳もされて、今を生きている。おみくじを引くと吉凶だけを見て一喜一憂する人も多いが、最上稲荷のおみくじの解説には吉凶にかかわらず、おみくじのお告げから導かれる「こころがまえ」を指針にするよう助言もある。[15] おみくじを通して神仏のお告げを受け止めて、よりよい人生に導くことが意識されている。おみくじのひとつの理想的な姿を伝えていると言ってよいだろう。

現代では江戸時代の和歌占いはほとんど姿を消したと述べたが、最上稲荷おみくじの他にも時代を超えて継承された貴重な例がある。紙のおみくじではなく、社寺に掲げられたおみくじの扁額の中にある。たとえば、倭神社（滋賀県大津市）のおみくじの扁額の和歌（全三十首）は『晴明歌占』所収歌とほぼ重なっている。社寺に掲げられているおみくじの扁額については、平川貴大氏運営のブログ「おみくじ好き！」におみくじ扁額の画像が多数掲載されている。[16] これらの画像を確認すると、おみくじの扁額は関西の社寺に集中しており、掲載されている和歌もいくつかの系統にわけられそうである。こうした扁額のおみくじは、紙媒体では残っていないが、かつてのおみくじの姿を残すものとして貴重であり、今後の研究が待たれる。

〔付記〕本稿をなすにあたり、最上稲荷広報部の有村美香氏より種々ご教示たまわり、貴重な資料をご提供いただいた。平川貴大氏のブログ「おみくじ好き！」所載のおみくじ扁額写真からも大きな示唆を得た。この場を借りて深謝申し上げる。なお、本稿は科学研究費補助金・基盤研究（C）「神と仏をめぐる和歌の包括的研究」（15K02226）および二〇一八年度成蹊大学長期研修による成果の一部である。

【注】

1　最上稲荷公式ウェブサイトhttp://www.inari.ne.jp/（最終閲覧二〇二〇年一月一二日）、および稲荷日應『潤華』（最上教報社、二〇〇三）による。

2　最上稲荷公式ホームページ「よくある質問」内の質問「おみくじに大凶があると聞きましたが、本当ですか」に対する回答に「当山のおみくじは、江戸初期から伝わるもので、版木も現存しています。内容は、法華経の経句を出典とする文言で、これを用いて願い事の可否を示すのは珍しいそうです。縁起が悪いといって「大凶」を外す寺社もあるようですが、当山は伝統を守って、「大凶」を残しています。苦言を呈する方もおられますが、最上さまからの開運指南、お示しと捉えて、日々を用心して過ごしていただきたいものです。良い順番に「大吉」「吉」「半吉」「凶」「半凶」「大凶」ですが、各寺社により異なるようです。」とある。http://www.inari.ne.jp/faq/（最終閲覧日二〇二〇年一月一六日）

3　最上稲荷本殿前おみくじ授与所掲示板に記載。

4 大野出・芹澤寛隆他「思想史としてのおみくじ」（『日本思想史学』46号）、芹澤寛隆『法華経御鬮霊感籤』解説（芹澤寛隆編『常在寺蔵 法華経御鬮霊感籤』、法華宗（本門流）霊鷲山 常在寺、二〇一六年十月発行、非売品）。

5 注4芹澤解説。

6 注4芹澤解説。

7 序品（1）、譬喩品（10）、信解品（1）、薬草喩品（2）、化城喩品（3）、如来寿量品（6）、法師功徳品（1）、常不軽菩薩品（1）、如来神力品（2）、薬王菩薩本事品（5）、風観世音菩薩普門品（1）。（　）内の数字は引用数。

8 『晴明歌占』と関連のある歌占本に早稲田大学図書館蔵『哥占』などがある。詳細は拙稿「歌占本の系譜―託宣歌から占いへ」（『説話文学研究』52号、二〇一七年九月）。

9 注8拙稿「歌占本の系譜」。

10 岡部弥次郎編『歌占』は『晴明歌占』と同じ和歌を用いた和歌占い本で解説も加えられている。最上稲荷おみくじの解説とは異なる内容である。

11 『一休ばなし』巻一―三（寛文八（一六六八）年刊）は一休が自らの名の由来として「有漏路（うろじ）より無漏路（むろじ）に帰る一休み雨ふらばふれ風ふかばふけ」の歌を詠んだ逸話を載せる。新編日本古典文学全集64『仮名草子集』（小学館、一九九九）。

12 注8拙稿「歌占本の系譜」。

13 注8拙稿「歌占本の系譜」。

14 拙稿「おみくじの近代―和歌・明治維新・新城文庫『おみくじ集』」（『愛知県立大学文字文化研究所紀要』47号、二〇一六年三月）。

15 最上稲荷本殿前おみくじ授与所掲示板に「おみくじには「大吉」「吉」「半吉」「凶」「半凶」「大凶」と表記されていますが、大吉だからといって油断せず、大凶だからといって悲観せず、今からスタートという気持ちで「こころがまえ」を参考に、進んで善事を積み開運の扉を開きましょう」とある。

16 「おみくじ好き！」https://omikujisuki.seesaa.net/（最終閲覧二〇二〇年一月一一日）。倭神社のおみくじ扁額https://omikujisuki.seesaa.net/article/460167940.html（最終閲覧 同上）。